

2010 年 10 月 20 日

実施報告：MULC October Forum

タイトル：「技術革新と外国語教育の冒険～なにが変わり、なにが残るの？」

講師：倉舘健一先生（慶應義塾大学総合政策学部講師・本学 MULC 非常勤研究員）

時：平成 22 年 10 月 13 日（水） 15 時 10 分–16 時 30 分

所：本学 6 号館 1 F、プレゼンテーションルーム

1：はじめに

2010 年度後期、倉舘健一氏を、千葉圏域大学連携事業における「多言語デジタルコンテンツの開発」推進のため、MULC の非常勤研究員として招聘している。自己紹介を兼ねた下記のフォーラムを開催した。

2：内容要旨

慶應義塾大学で開発に携わってきた下記のデジタルコンテンツを、経歴とともに、具体的に紹介した。

(a) 「フォローアップフランス語」(2002 年より制作中 <http://fuf.sfc.keio.ac.jp/>)

制作の経緯、目的、台本・画像作成、録音等の制作過程を紹介。2002 年当時の最新の Web テクノロジーを駆使し、当時は類を見なかったユニコードベースで Flash 動画を作成、また学内限定ではなく、インターネット上に外部からアクセスできる状態で公開した。当時の技術環境では多くの時間と労力を要したが、現在は Keynote 等のソフトでもはるかに省エネ・省時間で作成が可能。

(b) 動画教材：

- ・「音声解析教材（フランス語の母音）」 ・「手話教材」
- ・「フランスの結婚式」 ・フランス語圏でのインタビュー

少人数でも質の高い教材を作成できる。映像編集に膨大な時間をさかなくてもよいように、あらかじめ以下の点に注意して撮影するのがコツ。(1)撮影者の視点がそのまま映像素材になるという意識を持って撮影する、(2) 細切れ撮影せず、3 分程度は録画時間を保つ、(3)手振れを最小限に。そうした撮影時の配慮が後の編集作業を大幅に軽減する。

(c) 語学・文化コンテンツの作成

映像や音響のプロがつくる作品よりも、教員自身のパーソナリティが反映した、各言語

文化の生活感をともなったコンテンツの方がはるかに教育効果は高い。学生にとっても、制作する教員にとっても、デジタルコンテンツの作成は、紙媒体のテキスト作成にない楽しさがあり、これまでの教育を支援し豊かにする可能性をもっている。

3. 質疑応答

Q:「フォローアップフランス語」の主たる利用者は？ また効果は？

倉舘： 当初はフランス語の授業になかなかついてこれない学生のための補習教材として作成した。当初より商品化も念頭においていたが、制作途上においてインターネットでの公開に踏み切った。結果的に学生よりも、一般の社会人のアクセス数が圧倒的に多く、大変好評。彼らの方が高いモチベーションをもっているのだろう。

藤田：2002年制作なのでデジタル表現はややレトロな感じだが、かえって親しみやすさや手作り感があり、今でもフランス語学習おすすめサイトの代表格だ。とくに簡潔明快な文法説明が優れており、素朴な絵と連動させるのに成功している。

Q： 映像・動画教材はどのような媒体で流通・公開しているのか？

倉舘： まだ8年越しの制作途上であるが、将来的に教材としての販売も視野に入れている。そのため、YouTube等の一般の動画共有サービスには公開せず、学内サーバ上で公開している。ただし、インタラクションを除去した動画に再加工し、Podcastingに対応させるなどの様々な実験は行っている。

Q： デジタルコンテンツにこれから本格的に取り組んでいきたいのだが、私たちにはいわゆるICT技術が不足している。映像編集、字幕の付け方、Moodleへのアップロードや練習問題の作成などだ。今後どのように進めていけばよいのだろうか。

藤田： 月に2度、倉舘先生が来校する際に、コンテンツ作成に関わる各言語の教員と個別に面談していただき、今後に向けてのニーズの把握、技術的なアドバイス等をしていただく。先生方に面談日時調整のご連絡を差し上げるので、是非ご協力をお願いしたい。